

10月4日 年間第27主日 マタイ21章28～32節「隅の親石」に次いで積まれる石は

先々週から三週続いてぶどう園のたとえ話が続きます。ぶどう園三部作の最後は前の二つに比べるとちょっと残酷な内容となっています。ただ、これがイエスのエルサレム入城後に神殿で話された内容であることを考えると、これからイエスの身に起こる出来事との関係があることが理解できるでしょう。

今日の第一朗読に述べられているように、旧約聖書においてイスラエルはしばしばぶどう園にたとえられます。先週、先々週の福音では神の国を表していますが、今日の福音ではイスラエル歴史について語られているといえるでしょう。今回のぶどう園のオーナーは、ぶどう園ではなく別の場所に住んでいて、ぶどう園は農夫たちに管理を任せていました。いわゆる不在地主ですね。小林多喜二の小説にもあるように、あまりいい意味で使われませんが、この地主はとてもいい人でした。ところがそれに対して、管理を任せていた農夫たちはとんでもない人々でした。

それにしても農夫たちの仕打ちはひどいですね。主人が送ったしもべたちを袋叩きにし、あるいは殺すのはあんまりではありませんか。主人は神、しもべたちは神が送った預言者たちだとされています。預言者がそのような迫害を受けたかどうかはともかく、当時の権力者や指導者が預言者の言葉を受け入れなかったことを表しているのでしょう。洗礼者ヨハネの呼びかけに対してもそうでした。そして、最後に主人が送ったのは自分の息子でした。ふつうはそんな危険なところに大切な息子を送ることはしないでしょう。しかし、この主人はそれでも農夫たちが考え直すのを待っていたのです。

この息子はもちろん神の子であるイエスを表しています。イエスはこのたとえを通してご自分の身に起こる出来事を予告されたのです。たとえ話全体は暗い内容ですが、イエスの受難のあとに続く復活の栄光を表しているのが、イエスが引用された詩編の言葉です。

「隅の親石」は、石造りの建物を建てる最初に据える石です。この石を基準に建物が建てられます。ときどき見かける「定礎」は形式的なものですが、その考えに基づいています。レゴブロックなどで家をつくるときも角から作り始めますね。ジグソーパズルもまず角のピースを探します。「この石はいらない」といって捨てられた石が基準の石となり、そこから神の国の建設が始まり、その石を捨てた人の家は結局完成しませんでした。

この「捨てられた石」はもちろんイエスの受難を表しています。処刑とは「あなたはこの世界にいる必要がない」と断罪する行為です。そのイエスは三日目に復活し、そこから神の国が広まっていきました。しかし、イエスだけでなく社会から見捨てられた人々は大勢おられます。イエスの福音はそのような人々に対して語られ、彼、彼女らこそが神の国の中心であり、最初に招かれることを告げられました。「隅の親石」に次いで積まれるのはこの社会で見捨てられ、犠牲となっている人々なのです。

(柳本神父)